オンラインゼミの所産

高い出席率・課題提出率をもたらしたものとは

浅 原 知 恵 †

1　はじめに

本稿は，オンラインのみによる初年次ゼミ（フレッシュマンセミナー，以下，FS）の実施という，かつてない，想定外の授業運営を体験した直後に，その過程を振り返って記録し，考察するものである。

2020 年度, 新型コロナウィルスの影響下で, 全ての授業をオンラインで実施することが決まった。ゼミについては, 多くの教員が, Teams や Zoom によるリアルタイム双方向型で実施することを選択したが，講義科目の授業形態，使用アプリは，教員によって様々だった。初年次生にとっては，多様な友達との出会い，交流の機会が乏しい中で，ただでさえ慣れない大学での学びを，担当教員の試行錯誤の影響を受けながら進めなくてはならないという，大変に困難な状況での大学生活のスタートとなった。

今年度の初年次生が失った機会の影響は計り知れないが，一方で，FS に関しては，学生のコミットメントの度合いが例年よりも明らかに高いことがうかがえた。過去数年間の FS と比べ，出席率の高い学生が多く，課題の提出率が高かったことに加え，教員（筆者）の心証としても，学生の意欲的な面を感じられる場面が多く，提出物の質も高いと感じられたのである。

そこで本稿では，そのような学生のコミットメントをもたらした可能性がある要因について，これまでの FS との相違点を検討することを通して整理しておきたい。

2　今年度特有の開始前の状況

2.1　前年度に準備された経済学部初年次教育

経済学部では，初年次教育の充実に向けた取り組みを前年度から始めていた。様々なアカデミックスキル（認知能力）と同時に，その前提となる意欲（非認知能力）を育てることを目的に，学部の前期の教育内容の共通化をめざして，様々な授業案を検討し，2019 年度中に，2020 年度前期の授業内容の概要を共有していた。感染症の影響で，予定通りの形での実施は延期せざるを得なくなり，今年度は，初年次教育の目的を共有しながら，各自で実施することとした。

2.2　FS 開始前の学生とのコミュニケーション（4 月中旬～5 月 13 日初回授業まで）

通常であれば，FS 担当教員と所属学生とのコミュニケーションは，初回授業以降に始まる。しかし今年度は事情が異なっていた。「コロナで一人も取り残さない」という大学の方針のもと，インターネット環境の確認等のため，全学生と連絡を取ることを義務付けられていた。まず，4 月 15 日付けで，保証人宅宛てに通知を郵送し，所属ゼミ決定後，WebClass に登録すること，WebClass の案内にしたがって教員へメール連絡することを促した。また所属ゼミ決定の時期に合わせ，4 月 25 日に，筆者のゼミ（浅原ゼミ）は Teams で実施することを WebClass で案内し，Teams への登録を促した。これらの案内にしたがってメール送信・Teams 登録があ

った学生には，受領を確認した旨と，初回授業で会えることを楽しみにしている旨返信した。一方，4 月中に，メールや Teams 登録がなかった学生 3 名に対しては，5 月の連休中に，電話連絡を試み，授業開始前に，全学生と双方向のやりとりができることを確認した。

3　前期 FS の概要

3.1　授業の内容（5 月 13 日～前期終了まで）

初回授業時には，18 名中 17 名が時間通りに Teams に集合した（一人は開始時間を勘違いしており，翌週から出席）。授業の内容は，表 1 に示した通りである。関係づくりなど，学びの土台を整えることに重点を置く前半に対し，後半は，学びのスキルの習得が中心になっている。

3.2　学生のコミットメントについて

18 名の所属学生のうち，全ての授業を休まず出席した学生が 15 名(83.3%)おり，提出を要する 6 つの課題の提出率は 99.1%（1 名が課題の 1 つで未提出だったのみ）であった。寝坊と体調不良を理由に 4 回欠席した学生が 2 名いたが，いずれも，全ての課題を提出しており，前期中の欠席が多く，単位取得が不可能で留年が確定した学生は皆無だった。

これらを過去数年の実態と比較すると，2015～2019 年の 5 年間，全回出席した学生の割合は，平均で 60.3%（2015 年度から順に，12/20 名，14/20 名，13/22 名，15/24 名，9/18 名）であり，83.3%であった今年の水準を大きく下回っている。課題については，年ごとに数や内容が異なるため単純な比較はできないが，夏期休暇前を期限とするある課題の提出率は，4 年間の平均で 91.8%（2 名程度が未提出）であり，やはり今年の高さ(99.1%)は際立っている。

3.3　学生の感想

最終授業回でのグループでのふりかえりの結果，「最も自分のためになった」こととして，全 4 グループがあげたのは，「メールの書き方」と「レポートの書き方」であった。特に「メールの書き方」は，「これから必要になるけれど，全く経験がなくてわからなかったので，学べてよかった」との主旨の感想が複数の班から報告された。一方，「もっとこうしてほしかった」点として，「資料の探し方，ブックレポートの書き方をもう少し時間をかけて教えてほしかった」ことがあげられていた。

ゼミ内でアンケートは実施していないが，全学で実施した学生アンケートには，「一つ一つ丁寧に教えてくれる」「授業が分かりやすかった」「発声が聞き取りやすい」「優しくて安心感があった」との記述があった。

4　学生のコミットメントをもたらしたのは何か：例年の FS との相違

4.1 FS の開始前の要因

まず，授業形態がオンラインであったという要因以前の相違として，2 点があげられる。

4.1.1 初年次教育の準備状況と心構え

一つは，前年度中に，初年次教育の充実に向けての検討が重ねられていた点である。コロナの影響で実施は延期されたものの，事前にこうした準備がなされていたことが，図らずもコロナ下でのゼミ運営を，心理面でも授業案の面でも下支えしてくれたと考えられる。

4.1.2 授業以前に築かれた学生との関係性

もう一つは，授業開始以前に，教員と学生との個別的な関係が築かれていた点である。先述したように，オンライン授業実施に備え，担当教員は，授業開始前に，メールもしくは電話で

表 1　フレッシュマンセミナーの内容

授業回	テーマ・アクティビティ	内容	ねらい
1	教員あいさつ	簡単な自己紹介＆歓迎・慰労のメッセージ	アイスブレーキング
	Teamsでの作業	投稿のしかた，ファイルや課題の場所などをレクチャー	Teamsの使い方に慣れる
	お互いの顔見せ	簡単な自己紹介と休講中にしていたこと	お互いに知り合う
	自己紹介の投稿（宿題）	以下の内容を教員も含め全員がTeamsに投稿。①名前，出身など，②趣味，特技など，③自分を表す数字（自分を象徴する数字を１つあげて説明），④コロナ終息後に最初にやりたいこと，⑤+α ➡全員からの投稿にコメントを返信	お互いに知り合う・学び合う関係を築く
	質問・相談タイム （上級生による履修相談）	心配なことについての質問・相談の受付 初回ゼミ（2限）と同日の午後3時から，自由参加で，上級生が履修相談に応じる	新入生の不安を軽減する
2	履修説明（PPT利用）	①フレッシュマンセミナーがめざすこと，②1年間のスケジュール，③浅原ゼミの方４つの方針	自分が目指すものを自覚し見通しを持つ ゼミを安心して居られる時間・空間として体験する
	Zoomへの移動	Zoomの利用法を説明。ニーズに応じて，ダウンロード，ログインの方法などを個別に助言	Zoomの利用法を知る。特に，ブレイクアウト機能で，グループワークができるようになる
	グループワーク体験	ゼミの方針をふまえ，「正解がない」トピックについて，楽しんで話す	お互いに知り合い，学び合う関係を築く Zoomのブレイクアウト機能に慣れる
3	入学当初の課題への対処に関するビデオ講義	不本意入学，ブラックバイト，登下校時の災害，自立した生活について，学部教員4名が講義しているビデオを視聴	ゼミ担当以外の教員に触れる機会とする ※様々な問題に関する不安を軽減し，問題解決の力を高める
	リアクションペーパーの書き方（PPT利用講義） 視聴したビデオに対するリアクションを書く（実習・宿題）	リアクションペーパーの種類と意味，自分らしいコメントを書くためのステップとポイントを，実例を見ながら学習 学習したことをふまえた実習として，前半に視聴したビデオについてのリアクションを書く	様々な授業で課されるリアクションペーパー（コメントペーパー）の書き方を知る
4	宿題へのフィードバック	全員から提出されたリアクションペーパーへのコメント	全員から提出されたことを前向きに評価し，内容に言及することで，達成感や関心を持たれているという感覚を体験する
	メールの書き方（PPT利用講義） メールを書く（実習）	メールとは何か，メールの書き方を学ぶ意義，城西の先輩が書いた良くないメールと良いメールの実例，マナーを意識したメールの書き方のポイントを講義 ①欠席または遅刻の連絡，②授業に関する質問，③面談のお願い，の中から１を選んで，教員にメールを送信 ➡個別に返信し添削コメント	大学生にふさわしいメールの書き方を身につける
5	キャリア形成の基礎１（PPTと教員ビデオによる講義） キャリア教育概論	キャリア形成の考え方，現在と将来の日本・世界の状況，1年生の初めにキャリア形成に知っておくことの意義と重要性を伝える。城西大学チャレンジリストを示し，「今この瞬間からできること」をするよう後押し	自分たちが社会人として生きる世界に目を向ける 「就職」ではなく「キャリア形成」が必要であるとの認識を持つ ※今，自分にできる何かをするよう勧め励ます
	自己PRの準備（宿題）	以下の３つについて考えてくる。①長所と短所を各５つ，②小・中・高校，現在の４つの時点で，好きだったこと，夢中になったこと，それらに関係したエピソード，③何をしている時がいちばん楽しいか。得意なことは何か。	現在の自分とこれまでの自分を客観的に見たり，自分についての理解を言葉で表現する「構え」を身につける
6	キャリア形成の基礎２（PPTによる講義） 自己PRの書き方初級編	自己PRの目的，他者目線で考えることの重要性，多くの学生に自己PRは難しい・できないと感じさせる「４つのハードル」とその対処法，自己PRのポイントを学習	自己PR作成に必要な心の持ち方とスキルを知る
	他者目線＝社長の立場で考える（グループワーク）	「自営業の社長だったとしたら，どんな大学生を採用したいか」をグループで話し合って発表・共有	コミュニケーション時に，他者の視点を意識する姿勢を身につける 自分が成長するための課題に気づく
	ふりかえり	Formsでふりかえりを提出	
	自己PRを書く（実習・宿題）	例文やテンプレートを参考に，自己PRに取り組み，Formsで提出	自己PRを書くための基礎的スキルを身につける

表 1（つづき）

7	宿題へのフィードバック	全員から提出された自己PRへのコメント	他者の自己PRから学び，改善のヒントを得る
	レポート入門１ （PPT利用講義）	レポートとは何か，レポートではないものとの違い，レポートの種類，構成（序論・本論・結論），事実と意見の違いなどを，各種レポートの実例を見ながら学習 ➡全員を1回以上指名しながら進行	レポートの書き方の基礎を身につける
8	レポート入門２ （PPT利用講義）	レポートの条件，良いレポートとよくないレポート，レポート作成までのステップ，「問い」の設定のしかた（関心事をもとにテーマをどう絞り込むか）を学習 ➡全員を1回以上指名しながら進行	レポートの書き方の基礎を身につける
	自分の問い＝レポートテーマの探索（宿題）	①興味・関心などを箇条書きにする，②①の各トピックについて，きっかけや理由を考えて記述する，③①②をもとに，「知りたいこと」「これがわかったらおもしろいと思うこと」を「問い」の形になるように書く。以上をFormsで送信	自分が取り組みたいレポートのテーマを探索する
9	各自のレポートテーマの探索	提出された宿題を画面共有。出席者全員と個別にやりとりしながら，テーマを絞り込む。テーマを具体的に設定すること，資料収集の際のキーワードなどを助言	レポートテーマを概ね絞り込む
10	図書館ガイダンスの前に （PPT利用講義） 図書館ガイダンス１・２ （図書館制作のPPT利用）	文献を集める目的，客観的な根拠・裏づけの重要性について，課題文を利用して学習 「はじめての図書館」「図書館所蔵資料の探し方」	図書館の利用方法（水田記念図書館所蔵の資料の探し方）を知る
	資料の探し方（実習）	各自で，自分のテーマに関する文献を検索➡助言・提案	
11	図書館ガイダンス３ （図書館制作のPPT利用）	「雑誌記事・論文を探す」Cinii検索方法，図書館にない資料の取り寄せ方を学習	図書館の利用方法（雑誌記事の探し方）を知る
	資料の探し方（実習）	各自で，自分のテーマに関する文献を検索➡助言・提案	
12	ブックレポートの書き方	夏休の課題「自分のレポートテーマに関連した文献（本，新聞や雑誌の記事，インターネット上の記事など）を読み，その記録を書く」について，取り組み方を解説	ブックレポートの書き方を身につける
	前期のふりかえり （グループワーク）	前期に学んだトピックの全てを振り返った後，①最も自分のためになったこと，②もっと学びたかったことについてグループで話し合い，発表・共有	前期の学習内容の定着度をふりかえり，自分の課題を自覚する

学生と連絡を取っていた。既に，担当教員とのつながりができていたこと，さらには，その教員に「初回授業で会えることを楽しみにしている」と告げられたことによって，慣れないオンライン授業に出席する不安が，多少和らいだ可能性が考えられるだろう。

4.2 授業の方法

次に，授業の実施に関する要因として，以下の点が指摘できる。

4.2.1 Microsoft Forms を利用した課題提出

各種課題は，これまで，紙で作成して配布，回収していたが，オンライン授業では，主として Forms で作成し，授業内で Link を伝えて取組を求めるようにした。その結果，ゼミ終了直後に，その場で課題に取り組む姿が多く見られた。前日までに提出がない学生が若干名いることもあったが，授業前後に連絡すると，すぐに提出されることがほとんどであった。クリック一つで課題にアクセスできる手軽さと，用紙を

忘れる心配がなくなったことが，課題提出率の大幅な改善につながったと言えるだろう。

4.2.2 学生の提出物の画面共有

以上のように，Forms での課題提出を求めたことで，全員の回答を一覧で示すことが容易になり，画面共有によってゼミ生全員が見られるようになった。従来の授業では，提出された課題は，教員のみが目を通し，コメントを付して本人に返却していたが，今回は，全学生が提出した課題を見ながら，それに対する教員からのフィードバックを聞くことができるようになったのである（必要に応じ，提出物の記述に含まれる個人的な情報は伏せる配慮をした）。

他者の体験から学ぶ，いわゆる「観察学習」の機会が大幅に増したことも，この変化のメリットの１つだが，一層重要なのは，学生が「他者目線」を意識するようになったことだろう。青年期の学生にとって，同世代の仲間からの評価は，大人である教員の評価よりもある場合には重要である。前期に提出された課題の水準は，例年と比べ底上げされた感があった。これは，従来の学生が，教員に提出しさえすればよい「義務」として課題をとらえていたのに対し，今年度の学生が，ゼミ仲間に「よく見られたい」あるいは「見られて恥ずかしくないようにしたい」との思いに動機づけられて課題に取り組んだ結果である可能性が高いと思われる。

4.2.3. 「見学」制度の導入

オンライン授業ならではの手法として，今年度試みたのが，「見学」制度である。体調が優れないなどの理由で，話し合いへの参加や発表は控えたいが，ゼミには出席したいという意思のある学生に，体育の「見学」と同様に，発言を求めない「耳だけの参加」を認め，出席としてカウントするものである。通学を伴う対面授業では，体調が悪ければ休まざるを得ないが，「見学」参加により，学習の遅れや，連絡事項や課題を聞き逃すこと，防ぐことができる。FS では 2 名が利用し（各 1 回），その 2 名は，前期は全出席（欠席はゼロ）であった。当初，勉強嫌いの学生や，対人関係で消極的な学生が「サボる」ために利用する可能性も考えたが，そうした事態にはならず，むしろ，学生の学ぶ意欲を後押しする方向に作用したと考えられる。

4.3 学生とのコミュニケーション

授業の方法と並んで，例年と大きく異なっていたのが，学生とのコミュニケーションのあり方である。

4.3.1. 効率的で多様性にも配慮した情報伝達

今年は，Teams 利用により，大学や学部からの各種連絡事項を，FS の時間を待たずに即時に投稿したり，口頭で伝えた内容を，文字でも残しておくなど，メールよりも確実で，効率的な情報伝達が可能になった。Teams の投稿欄を利用した情報伝達は，メールと違って宛先を指定する必要がないなど手間を削減できるメリットがある。学生にとっては，少なくとも週に 1 度は，授業で Teams を立ち上げるため，重要な通知を見逃すリスクが減ったと考えられる。

また，ゼミ内での口頭のみによる伝達というこれまでのやり方は，いわゆる visual learner（視覚学習者）への配慮が足りないことが，以前から気になっていた。口頭と文字の両方で伝達することは，多様な学生に情報を伝わりやすくする配慮としても，意味があったと思われる。

4.3.2. チャット機能を利用した個別連絡

表 1 に示したように，FS では，「メールの書き方」を教えている。大学以降の人間関係では，「メールの書き方」を身につけることは必須であり，学生の多くも最もためになったと回答している内容であった。しかし今年，お互いの連絡手段をメールに限定せず，Teams のチャット機能も併用したところ，教員から学生への個別

連絡も，学生から教員への連絡・相談も，より早く，確実に行えるようになった。中でも特に，チャット機能の利用が功を奏したと感じられたのは，欠席者への連絡であった。

FS の欠席者へのゼミ教員としての対応は，従来，事前連絡のない欠席が 3 回以上連続した場合に，メールを出したり，学部事務室に連絡先を尋ねて電話したりするというものだった。しかし今年は，欠席した学生には，Teams のチャット機能を利用して直後に連絡し，①欠席していたので心配して連絡したこと，②その日の授業の概要と宿題，③わからないこと，できないことは何でも質問してよいこと，の 3 点を伝えた。昨年までの（最初の欠席から一定時間が経過した後の）メール連絡では，返信が全くないか，遅れがちであったのに対し，今年は，ほとんどの場合すぐに返信があり，欠席した日の課題についても後日提出があった。

不登校に至る学生の中には，一度休んだことで，授業の遅れ，聞き逃した課題，教員の評価などが気になって，さらに行きづらくなるという悪循環に陥ったケースが少なからず見受けられる。したがって今年，連絡ツールとしてチャットを利用し，FS 欠席者に早い段階で上記①②③を伝達したことで，不登校に至る学生を未然に防ぐことに寄与したという可能性もあるのではないか。あくまで可能性に過ぎないが，今後の検討課題として指摘しておきたい。

学生が，メールと比べ，心理的なハードルの低いチャットに依存し，メールでの連絡を回避することは望ましくない。教員にも，時間外の気軽な連絡にその都度対応するゆとりはない。しかし，日頃，LINE や Twitter などの手軽なやりとりに慣れ親しんでいる学生への連絡を，メールのみに限定することも必ずしも適切とは言えないだろう。「必要な情報を確実に伝える」ための手段の一つとして，適切なチャットの活用法を検討すべき時期ではないだろうか。

4.4 その他

その他の相違点として，今年のゼミ生は，教員から One of them としての存在ではなく，個として認識されている感覚が，圧倒的に強かったと思われることを付記しておきたい。

メールやチャットを利用した個別的な連絡が従来よりも多かったことに加え，オンライン授業では，他のゼミ生と同時に参加していても，物理的には 1 人で PC 等と向き合っているという事実も，恐らく影響しているだろう。

心理学のある理論では（Deci & Ryan,1985）意欲が低い人の自発的な行動を促すためには，「誰かとつながっている（誰かに関心を持たれている，理解されている）という感覚があること」が重要だとされている。教員に個人として認識されていると感じたことも，今年度の学生のコミットメントを高めた要因の一つだと考えられる。

5　おわりに

従来の FS との相違点をもとに，前期中の低い欠席率・高い課題提出率をもたらした可能性のある様々な要因について検討した。どの要因が，どれほど寄与したかについては明らかにすることは難しいがオンライン授業に付随する要因に限らず，全ての要因が複合的に絡み合った結果として考えてよいだろう。

学生のコミットメントが，後期も持続するのか，する／しないとすればなぜなのか。後期の FS での実践を経て，あらためて検討したい。

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behaviour*. New York: Plenum.